

## 9 ベクトルの一次独立な最大個数

$V$  をベクトル空間,  $X$  をその部分集合とすると,  $X$  の中に  $r$  個の 1 次独立なベクトルはあるが,  $X$  の中のどの  $r+1$  個のベクトルも 1 次従属になるとき,  $r$  を  $X$  のベクトルの 1 次独立な最大個数という.

定理 9.1 (教科書 p.75, 定理 4.3.1)

$V$  のベクトルの二つの組  $\{v_1, \dots, v_n\}$  と  $\{u_1, \dots, u_m\}$  に対し,  $v_1, \dots, v_n$  の各ベクトルが  $u_1, \dots, u_m$  の 1 次結合でかけられるならば,

$(v_1, \dots, v_n)$  の 1 次独立な最大個数  $\leq (u_1, \dots, u_m)$  の 1 次独立な最大個数

証明  $u_1, \dots, u_m$  のベクトルの 1 次独立な最大個数を  $r$  とすると,  $r$  個の 1 次独立なベクトルがある. 簡単のため  $u_1, \dots, u_r$  が 1 次独立とする. このとき,  $j \geq r+1$  に対して  $u_j, u_1, \dots, u_r$  は 1 次従属なので, 定理 8.2 (教科書定理 4.2.2) により  $u_j$  は  $u_1, \dots, u_m$  の 1 次結合で書ける. したがって仮定から  $v_1, \dots, v_n$  は  $u_1, \dots, u_m$  の (したがって上の事から  $u_1, \dots, u_r$  の) 1 次結合で書ける. ところが, 定理 8.3 (教科書定理 4.2.3) により, このとき  $(v_1, \dots, v_n)$  の 1 次独立な最大個数は  $r$  以下.  $\square$

定理 9.2 (教科書 p.71, 定理 4.3.2)

$u_1, \dots, u_m$  のベクトルの 1 次独立な最大個数が  $r$  であるための必要かつ十分な条件は:

$u_1, \dots, u_m$  の中に  $r$  個の 1 次独立なベクトルがあり, 他の  $m-r$  個のベクトルはこの  $r$  個の 1 次結合で書ける.

証明 定理 8.2 (教科書定理 4.2.2) により必要性は先ほど証明した. また, 十分性は明らかにこの条件のもとでは定理 9.1 (教科書定理 4.3.1) により,

$u_1, \dots, u_m$  のベクトルの 1 次独立な最大個数は  $r$  以下.  $\square$

行列  $A$  の簡約化を  $B$  と書くとき, それぞれの列ベクトルへの分解を

$$A = [a_1, \dots, a_n], \quad B = [b_1, \dots, b_n]$$

と書くと,  $x \in \mathbb{R}^n$  に対して  $Ax = 0 \Leftrightarrow Bx = 0$  である.  $\text{rank}(A)$  の定義から, これは  $B$  の行の主成分を含む列ベクトルの個数と同じであり, これらは 1 次独立. これらの列ベクトルを  $b'_1, \dots, b'_r$  とかくと, 他の  $B$  の

列ベクトルは  $b'_1, \dots, b'_r$  の一次結合でかけるので,  $r$  は  $B$  の列ベクトルの 1 次独立な最大個数となる.  $Ax = 0 \Leftrightarrow Bx = 0$  に注意すると,  $r$  は  $A$  の列ベクトルの最大個数にも等しい.

定理 9.3 (教科書 p.77 定理 4.3.3)

$$\begin{aligned} \text{rank}(A) &= A \text{ の列ベクトルの 1 次独立な最大個数} \\ &= A \text{ の行ベクトルの 1 次独立な最大個数} \end{aligned}$$

証明 上で言った事により, 前半の等式が成り立っている. 後半を示そう.

ふたたび  $A$  の簡約化を  $B$  とすると,  $B$  の零ベクトルでない行ベクトルは 1 次独立である. その個数は主成分を含む列ベクトルの個数  $\text{rank}A$  と等しい (この個数が  $B$  の一次独立な行ベクトルの最大個数を与える)

一方,  $A$  と  $B$  は互いに基本変形を行に施してうつりあうので,  $B$  の行ベクトルは  $A$  の行ベクトルの一次結合で書け, 定理 9.1 (教科書定理 4.3.1) により,

$$\begin{aligned} &A \text{ の行ベクトルの 1 次独立な最大個数} \\ &\geq B \text{ の行ベクトルの 1 次独立な最大個数} = \text{rank}(A) \end{aligned}$$

逆に  $A$  の行ベクトルは  $B$  の行ベクトルの基本変形で得られるので, 逆向きの不等式も得られる.  $\square$

定理 9.4 (教科書 p.78, 定理 4.3.5)

行列の簡約化は唯一通りに決まる.

証明  $A$  の簡約化を  $B$  と書いて,  $B$  が一意に決まることを示す. まず,  $a_1 \neq 0$  のときは  $b_1 = e_1$  となる. (第一成分が 1, それ以外の成分は 0)  $a_1 = 0$  なら  $b_1 = 0$  どちらにしても一意に  $b_1$  は決まる.  $a_k$  が  $a_1, \dots, a_{k-1}$  の 1 次結合で書けなければ,  $b_k$  は主成分を含む基本ベクトルで,  $b_1, \dots, b_{k-1}$  と一次独立になる.  $Ax = 0 \Leftrightarrow Bx = 0$  だったので,  $a_k = c_1 a_1 + \dots + c_{k-1} a_{k-1}$  から  $b_k = c_1 b_1 + \dots + c_{k-1} b_{k-1}$  を得る. このうち 1 次独立なものたちだけで  $a_k$  を表したとき

$$a_k = d_1 a'_1 + \dots + d_r a'_r$$

となったとすると, 上の事から対応する  $b'_j$  は一次独立な基本ベクトルで,  $b_k = d_1 b'_1 + \dots + d_r b'_r$  となり,  $b_k$  も一意に決まる.  $\square$

定理 9.5 (教科書 p.78, 定理 4.3.6)

$V$  のベクトル  $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_m$  は 1 次独立とする . ベクトル  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$  が  $m \times n$  行列  $A$  を用いて

$$(\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n) = (\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_m)A$$

と表せるとき ,

(1)  $(\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n)$  と  $A$  の列ベクトル  $(\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n)$  には同じ 1 次関係式が成り立つ .

(2)  $m = n$  のとき ,

$(\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n)$  が 1 次独立  $\Leftrightarrow A$  が正則行列 (i.e.  $\text{rank}(A) = n$ )

証明 (1)

$$c_1 \mathbf{v}_1 + \dots + c_n \mathbf{v}_n = \mathbf{0}$$

とする . このとき左辺は  $(\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n)\mathbf{c}$  と書ける . ただし ,

$$\mathbf{c} = \begin{pmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \\ c_n \end{pmatrix}$$

仮定によりこれは

$$(\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_m)A\mathbf{c} = \mathbf{0}$$

となるが ,  $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_m$  が 1 次独立なので ,  $A\mathbf{c} = \mathbf{0}$  でなくてはならない .  
つまり

$$c_1 \mathbf{a}_1 + \dots + c_n \mathbf{a}_n = \mathbf{0}$$

となる .

(2)  $m = n$  とする .

$$c_1 \mathbf{v}_1 + \dots + c_n \mathbf{v}_n = \mathbf{0}$$

とすると , (1) によりこれは

$$c_1 \mathbf{a}_1 + \dots + c_n \mathbf{a}_n = \mathbf{0}$$

と同値である . したがって  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$  が 1 次独立ならば  $c_1 = c_2 = \dots = c_n = 0$  となり , これは  $\text{rank}(A) = n$  を意味している . 逆も ,  $\text{rank}(A) = n$  のとき

$$c_1 \mathbf{a}_1 + \dots + c_n \mathbf{a}_n = \mathbf{0}$$

の解は  $c_1 = \dots = c_n = 0$  しかなく , これは  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$  が 1 次独立であることを言っている .  $\square$

例 9.1 (教科書 p.79, 例題 4.3.2)

次の  $\mathbb{R}[x]_3$  のベクトルの 1 次独立な最大個数  $r$  と  $r$  個の 1 次独立なベクトルを一組求め、他のベクトルをこれらの 1 次結合で表せ.

$$\begin{aligned} f_1(x) &= 1 + x + 3x^2, & f_2(x) &= 1 + 2x - x^3, \\ f_3(x) &= 1 + 3x - 3x^2 - 2x^3, & f_4(x) &= -2 - 4x + x^2 - x^3, \\ f_5(x) &= -1 - 4x + 7x^2 \end{aligned}$$

解  $f_1, \dots, f_5$  を 1 次独立なベクトル  $1, x, x^2, x^3$  の 1 次結合で書くと,

$$(f_1, \dots, f_5) = (1, x, x^2, x^3) \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & -2 & -1 \\ 1 & 2 & 3 & -4 & -4 \\ 3 & 0 & -3 & 1 & 7 \\ 0 & -1 & -2 & -1 & 0 \end{pmatrix}$$

と書ける. 右辺の行列を  $A$  とすると, 定理 9.5(教科書 定理 4.3.6) により  $f_1, \dots, f_5$  の 1 次関係式を求めるには  $A$  の列ベクトルの 1 次関係式を求めれば良い. これは,  $A$  の簡約形を求めれば良いことになる. 計算して

$$\begin{aligned} & \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & -2 & -1 \\ 1 & 2 & 3 & -4 & -4 \\ 3 & 0 & -3 & 1 & 7 \\ 0 & -1 & -2 & -1 & 0 \end{pmatrix} \longrightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & -2 & -1 \\ 0 & 1 & 2 & -2 & -3 \\ 0 & -3 & -6 & 7 & 10 \\ 0 & -1 & -2 & -1 & 0 \end{pmatrix} \\ & \longrightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & 0 & 2 \\ 0 & 1 & 2 & -2 & -3 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & -3 & -3 \end{pmatrix} \longrightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & 0 & 2 \\ 0 & 1 & 2 & 0 & -1 \\ 0 & 0 & 0 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

最後の行列には主成分を含む列ベクトルは 3 個あるので, 1 次独立なベクトルの最大個数は 3 個. 簡約形  $B$  の列ベクトルについて,

$$b_3 = -b_1 + 2b_2, \quad b_5 = 2b_1 - b_2 + b_4$$

が成り立っている.  $A$  も同じ関係式を満たすので,  $f_1, f_2, f_4$  が 1 次独立で,

$$f_3 = -f_1 + 2f_2, \quad f_5 = f_1 - f_2 + f_4$$

が成り立つ.

練習 9.1 教科書 p.80 問題 4.3 の 1. を解け